

平成 2 8 年 6 月 2 0 日現在

機関番号：1 2 1 0 2

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014 ~ 2015

課題番号：2 6 8 8 4 0 0 8

研究課題名 (和文) 言語における競合：形態論と統語論の関係についての新提案

研究課題名 (英文) Competition in Language: New Proposals on the Relationship between Morphology and Syntax

研究代表者

西牧 和也 (Nishimaki, Kazuya)

筑波大学・グローバルコミュニケーション教育センター・特任研究員

研究者番号：1 0 7 3 4 1 8 9

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 1,900,000 円

研究成果の概要 (和文) : 言語間の相違をどのように説明するかという問題に対するアプローチとして競合理論という考え方が Ackema and Neeleman (2004) によって提唱されている。本研究では、この競合理論に基づき、日英比較を中心に言語間比較を行った。競合理論によれば、形態部門と統語部門は構造具現を巡り競合し、どちらでの構造具現が優先されるかによって言語は形態優先言語と統語優先言語に大別されることになる。本研究では、英語は統語優先言語、日本語は形態優先言語であると想定し、先行研究で個別に論じられてきた日英語の相違が統語優先言語と形態優先言語の相違として統一的に説明できることを明らかにした。

研究成果の概要 (英文) : As an approach to cross-linguistic variations, Ackema and Neeleman (2004) propose Competition Theory. This study is cross-linguistic comparison based on Competition Theory, focussing on English and Japanese. Its core assumption is that morphology and syntax compete for structural realization. On this assumption, languages are divided into morphology-preferring and syntax-preferring languages, depending on whether morphological or syntactic realization is preferred in a given language. Assuming that English and Japanese exemplify syntax-preferring and morphology-preferring languages, this study has showed that English-Japanese contrasts that have been separately discussed in the literature can be given a unified account as resulting from the distinction between syntax-preferring and morphology-preferring languages.

研究分野：形態論・語形成

キーワード：形態論と統語論の競合 言語の普遍性と多様性 パラメーター 具現形式 言語間比較

1. 研究開始当初の背景

(1) 理論的背景

言語間の相違をどのように記述・説明するかという問題に対するアプローチとして、Ackema and Neeleman (2004) によって、競合理論という考え方が提唱されている。この競合理論では、形態部門と統語部門という2つの文法部門は、抽象的な形態統語構造の音韻具現を巡り競合し、形態的具現と統語的具現のうち、どちらが優先的に選択されるかが個別言語ごとに決まっていると看做する。従って、競合理論では、言語は、統語的な構造具現を優先する言語（統語優先言語）と形態的な構造具現を優先する言語（形態優先言語）に大別されることになる。例えば、動詞 *drive* とその目的語 *truck* のような述語・項の関係を音韻具現する形式として、複合動詞 *to truck-drive* と動詞句 *to drive trucks* が、潜在的には可能である。しかし、英語では、原則、後者の統語的具現形が選択される。このような事実に基づき Ackema and Neeleman は、英語では動詞句によって複合動詞の生起が阻止されると考え、英語を統語優先言語と分析している。対照的に、形態優先言語では、文法関係は、原則、(複合)語で具現されることになる。影山 (1993) が指摘するように、日本語では複合語が広く用いられており、日本語は形態優先言語の事例と考えることができる。競合理論の特筆すべき点は、いずれのタイプの言語でも、一定の環境では、優先される具現形式とは異なる具現形式の選択が許されるという点である。例えば、Ackema and Neeleman によると、統語優先言語であっても、 $[_N [_V \text{ truck drive}] \text{ er}]$ のような複合語の内部においては、述語・項の関係は複合動詞によって具現される。

(2) 動機

申請時までの研究から、直接修飾 (direct modification) という修飾形式が言語間でどのように異なるかに関して、競合理論的なアプローチが新たな知見を与えることが分かっていた。直接修飾とは、一種の形容詞による名詞修飾構造であるが、副詞的に書き換えられる non-intersective な解釈を持つという特徴がある。従来は、*old friend* (= *a person who has been a friend for a long time*) という句表現に見られるように、英語では直接修飾が可能であるが、日本語では「古い友人」という句表現が不自然なことから直接修飾は不可能であると考えられてきた (Sproat and Shih (1988), Baker (2003))。しかし、句ではなく語を見れば、日本語でも「旧友」(=「古くからの友」) という複合語があり、修飾要素「旧」と被修飾要素「友」の関係は、直接修飾の関係であるように思われる。競合理論に基づけば、直接修飾自体は日英語に見られるが、両言語はその具現方法において異なる、ということになる。この直接修飾の研究を通じて、競合理論的な見方で初めて浮かび上がって

くる日英語の隠れた相違が他にもあるのではないか、という問題意識が生じ、本研究の着想を持つに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、言語間の相違に対する競合理論のアプローチの可能性を追究し、競合理論の発展に寄与することである。より具体的には、先行研究で個別に論じられてきた言語間の様々な相違を、形態優先言語と統語優先言語の相違という観点から、統一的に説明することを目指す。特に、抽象的な形態統語構造はいかなる言語にも共通しているが、その具現形式が、統語優先言語と統語優先言語、それぞれの言語タイプで優先される具現形式の相違に応じて、言語間で異なることを証明する。

3. 研究の方法

対象言語として日英語に焦点をあて、形態優先言語と統語優先言語の相違という観点から日英比較を行う。より具体的には、日本語の複合語とそれに対応する英語の句表現について、先行研究で個別になされてきた分析を競合理論の観点から再解釈し、名詞修飾構造の場合と同様の説明があてはまる日英語間の対立が他に見られないか検討する。そして、調査結果を競合理論から捉え直すことで、このような日英語間の相違が、競合理論で捉えべき言語間相違であることを証明する。随時、途中経過を、形態論専門の学会・研究会で発表し、学会誌へ投稿することで、他の研究者からのフィードバックを得る。

4. 研究成果

(1) 主な研究成果

平成 26 年度は、結果構文と等位構造について、日英語の対立が統語優先言語と統語優先言語の相違として捉えられることを明らかにした。結果構文は動詞が結果状態を含意しない強い結果構文 (e.g. *to pound the metal flat*) と結果状態を含意する弱い結果構文 (e.g. *to paint the wall red*) に分けられる。先行研究では、強い結果構文が可能であるかどうかに関して、類型論的な相違が指摘されており、英語では可能であるが日本語では不可能であるとされてきた (Washio (1997))。例えば、英語では *to pound the metal flat* というように、強い結果構文は動詞句の形式を取るが、対応する日本語の動詞句は「金属を平らに叩いた」というように不自然になる。しかし、競合理論から、形態優先言語である日本語では強い結果構文は形態的に具現されることが予測される。実際に、*to pound the metal flat* という英語の動詞句は日本語では「叩き延す」という V-V 複合語に訳される。更に、両者には完全に平行的な振る舞いが観察されることから、結果構文に関して、英語の動詞句と日本語の V-V 複合語は同じ基底構造を有するものと考えられることができる。つまり、競

合理論の観点からすると、V-V 複合語は結果構文の形態的具現形であり、形態優先言語である日本語では、結果構文は V-V 複合語の形式で存在すると分析できるのである。

一方、弱い結果構文は英語と同様に日本語でも「壁を赤く塗る」のように動詞句の形式を取る。これは、一定の環境において、優先される具現形式とは異なる具現形式の選択が許される事例と分析できる。一般的には、結果構文は、主要部移動により派生されると分析されている。弱い結果構文の場合、基底構造から主要部移動により複合語を派生しようとする、主要部移動に関する一般的制約の違反が生じてしまう。このため、日本語は、形態優先言語であっても、弱い結果構文に関しては、その具現形式として動詞句を選択するのである。

更に、等位構造を比較することで、競合理論は、名詞修飾や結果構文に見られる主要部・非主要部という非対称的な構造だけでなく、対称的な構造についても有効であることがわかった。例えば、Shimada (2013) によると、等位複合語のうち、2 つの構成要素が単一概念を表す並列複合語 (dvandva compound) (e.g. 「長短」 (= 「長さ」)) は日本語では生産的であるが、英語には存在しないとされている。並列複合語とは等位構造の形態的具現形であると考えれば、この相違も統語優先言語と形態優先言語の相違を反映する事例として競合理論から導くことが可能である。

平成 27 年度は、当初の計画では、日英語以外の言語間比較に着手する予定であった。しかし、平成 26 年度の研究から、日英語には、複合語対句という対立以外に、競合理論で捉えるべき対立が多数あることが分かった。また、従来提唱されている競合理論は、明確な理論体系として確立されておらず、諸点に関して明確な定義を要する部分が多々見られることが判明した。

以上の点を踏まえて、平成 27 年度は、当初の計画を変更し、明確な理論体系を有する競合理論を確立したうえで、日英比較を更に推進することとした。その結果、まず、談話レベルにまで競合理論が適用可能であることがわかった。例えば、*It is raining, I tell you* という文において、*I tell you* という表現は話者が聞き手へ情報の伝達という行為を行っているということを保証しており、この意味で、*I tell you* は発話行為の標識 (speech act marker) として機能していると言える。Hirose (1995) などにおいて、この *I tell you* は日本語では「雨だよ」における「よ」という文末終助詞に対応することが指摘されている。*I tell you* というのは自由形であり、文末終助詞「よ」は拘束形態素である。自由形とは統語部門の最小単位であり、拘束形とは形態部門の最小単位である。この点を考慮すれば、発話行為の標識として、統語優先言語である英語は統語部門の最小単位である自由形を用

い、形態優先言語である日本語は形態部門の最小単位である拘束形を用いると競合理論に基づき説明することができる。

句と複合語、自由形と拘束形というような具現形式の対立に加えて、日英語は主要部移動 (head movement) という操作においても対立を見せる。競合理論の理論体系を明確に確立した結果、この主要部移動に関する対立も競合理論で捉えられる現象であることが分かった。

先行研究では、主要部移動には合成 (conflation) と編入 (incorporation) の 2 種類あり、どちらを用いるかで、類型論的な相違があることが観察されている。よく知られているように、英語では品詞転換 (conversion) による語形成が生産的である。例えば、*to walk* のような非能格動詞 (unergative verb) は名詞からの品詞転換により形成される。Hale and Keyser (2002) などにおいて、この品詞転換には合成が関与するとの指摘がある。これに対して、日本語では、編入による複合語の派生が生産的であることが知られている。例えば、*to walk* に対応する「散歩する」のような複合語は、名詞「散歩」の軽動詞「する」への編入により派生されるとの分析がある。このような日英語の対立から、統語優先言語では合成が用いられ、形態優先言語では編入が用いられるという対応関係が示唆される。

この対応関係は競合理論のもと次のように説明することができる。合成とは統語優先言語において X^0 を作るための手段であると考えることができる。合成の出力は形態的な単純な語になる。形態的に単純な語とは、単一形態素であり、形態的な内部構造を持たない。この点において、形態的に単純な語は句と同じであり、統語的具現形の二形態と見做すことができる。従って、統語優先言語では形態的に単純な語を派生するために合成が使用されることになる。一方、編入の出力は複合語となる。複合語は形態的な内部構造を持ち、形態的具現形として機能する。従って、形態優先言語では、複合語を派生するために、編入が使用されることになる。このように、主要移動に関する類型論的な相違は、競合理論のもと、統語優先言語と形態優先言語の相違を反映するものとして根源的な説明が与えられることになるのである。

尚、上記の研究成果は、博士論文 (A Study on Cross-Linguistic Variations in Realization Patterns: New Proposals Based on Competition Theory, 2015, University of Tsukuba) として纏められた。

(2) 研究成果の位置

従来、生成文法の研究では、原理や制約とは違反が許されないものであると考えられてきた。しかし、最適性理論 (Prince and Smolensky (1993)) が提案されて以来、原理や制約には違反があってもよいとする文法モデルが見られるようになった。競合理論もそ

のような文法モデルの一つであり、本論文は
このように制約違反を認める文法モデルに
基づく日英語比較研究として位置づけられ
る。また、これまで競合理論を本格的に取り
入れた対照研究は行われておらず、提唱者で
ある Ackema and Neeleman 自身も、分析の対
象としているのは英語とオランダ語におけ
る述語・項関係の具現に關してのみである。
従って、競合理論とは言語の何をどのように
明らかにし、どのような可能性を秘めた理論
であるのか、いまだ、十分な検証は行われて
いないと言える。本研究の意義は、日英語の
ような言語類型的に關係がないとされる言
語も分析の対象とし、また、競合理論を述
語・項関係以外の広範囲な文法現象に適用す
ることで、競合理論的なアプローチの可能性
を包括的に追究する初の研究であるという
点に求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Nishimaki, Kazuya, “Agnieszka Pysz, The
Syntax of Prenominal and Postnominal
Adjectives in Old English, Newcastle:
Cambridge Scholars Publishing 2009
xviii+331pp,” 『近代英語研究』第32巻, 査
読有, 2016, pp. 149-161.

Nishimaki, Kazuya, “Cross-Linguistic
Variations in Realization Patterns of Speech Act:
Competition Theoretic Approach,” *JELS* 33, 査
読有, 2016, pp. 249-255.

Yasuhara, Masaki and Nishimaki, Kazuya.
“Double Object Constructions in Japanese: A
Competition-Theoretic Approach,” *Proceedings
of the 17th Seoul International Conference on
Generative Grammar*, 2015, 査読有, pp.
584-596.

〔学会発表〕(計7件)

Yasuhara, Masaki and Nishimaki, Kazuya. “A
Unified Account of Directed Motion
Constructions in English and Japanese,” The 12th
Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL
12), 2016年5月13, Central Connecticut State
University (The United States).

Nishimaki, Kazuya. “Cross-Linguistic
Variations in Realization Patterns of Complex
Predicates: A Competition-Theoretic Approach,”
The 11th Newcastle-upon-Tyne Postgraduate
Conference in Linguistics, 2016年3月18日,
Newcastle University (The United Kingdom).

Nishimaki, Kazuya. “Descriptive Genitives as
Denominal Adjectives: A Cross-Linguistic

Perspective,” 2016年3月5, UNC Spring
Colloquium, University of North Carolina at
Chapel Hill (The United States).

Nishimaki, Kazuya. “Root Compounds as
Lexicalized Phrases: A Competition-Theoretic
Perspective,” 2015年12月17, Morphology Days
2015, KU Leuven (Belgium).

納谷亮平, 五十嵐啓太, 西牧和也 『左側要
素が指示性を持つ複合語の効果と右側主要
部の規則』日本言語学会第151回大会, 2015
年11月26日, 名古屋大学(愛知県名古屋市).

Yasuhara, Masaki and Nishimaki, Kazuya.
“Double Object Constructions in Japanese: A
Competition-Theoretic Approach,” The 17th
Seoul International Conference on Generative
Grammar, 2015年8月6日, The Korean
Generative Grammar Circle, Kyung Hee
University (Korea).

Nishimaki, Kazuya. “Cross-Linguistic
Variations in Realization Patterns of Speech Act:
Competition Theoretic Approach,” the 8th
International Spring Forum, The English
Linguistic Society of Japan, 2015年4月19日,
Seikei University (Tokyo, Japan).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西牧和也 (NISHIMAKI Kazuya)

筑波大学・グローバルコミュニケーション教
育センター・特任研究員

研究者番号: 10734189